【実践報告５】

主体的な追究力と思考力・判断力・表現力の育成
～　明星スタンダードの確立を目指して　～

明 星 小 学 校

Ⅰ　はじめに

明星小学校では、県内唯一の私立学校としての自負を持ち、確かな学力を身につけ、礼儀正しく思いやりのある人間性豊かな児童の育成をめざしている。

また、「主体的に追究する子」「思いやりの心があり礼儀正しい子」「たくましい子」を、めざす子ども像とし、その実現のため、「学力向上PJ（プロジェクト）」「豊かな心の育成PJ」「体力向上PJ」を立ち上げ、教職員一丸となって取り組んでいる。

Ⅱ　研究主題および主題設定の理由

主体的な追究力と思考力・判断力・表現力の育成 ～　明星スタンダードの確立を目指して　～

これからの子どもたちは、グローバル化や情報化などによる社会の変化に対応し、自分たちを取り巻く様々な課題に向き合い解決しようとする力が必要である。社会の加速度的な変化の中でも自立した人間として、高い志と意欲を持って、貯蓄された知識を礎としながら、何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指す資質・能力が求められる。あわせて、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことができるような資質･能力を身につけることも同時に求められている。このような資質・能力を育むために、実際の社会や生活の中で生きて働く「知識及び技能」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性など」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力など」の３つの柱を一体的に育成していかなければならない。

当初は、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」において、

① 単元や題材のまとまりの中で、主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか
② グループなどで対話する場面をどこに設定するか
③ 学びの深まりを作り出すために子どもが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか

といった、「対話」を通して学びを深めるための校内研究を考えていた。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための休校等で思うように授業が進められない状況となり、特に「対話」や「ペア・グループ活動」等も厳しいものとなった。（そのような中でも、本校では「遠隔授業」について教師が研修を重ね、５月よりのZoom配信につなげた。６月からは､第１・３土曜日に３時間の「遠隔授業」を実施している。）

今年度は､このような状況の中でも､子どもたちに確かな学力をつけるために､教師間で共有する｢明星スタンダード」を構築し、明星小学校の授業とはどうあるべきかを教師全員で議論した。そうすることが、「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成する授業づくりにつながっていくと考えたからである。

Ⅲ　研究内容

研究主題から研究仮説を設定し、年間を通して学年部に分かれて研究を行う。また、各教科の目標達成のため、個人の授業課題を設定し、授業デザインや教材研究を深め、各教科の本質を探るなどの研究に取り組む。

その際、ペアやグループ活動、タブレット等のICT機器を使った活動も取り入れる工夫をする。ペアやグループ活動については、計画している授業の目標達成のためには、どのような課題をどのタイミングで提示するかを考えながら、効果的に取り入れるようにする。また、ペアやグループ活動を取り入れる意義を、教師全員で議論しながら共通理解していきたい。

タブレット等のICT機器については、あくまでも、その使用が目的ではなく補助であり、文房具の一つとして捉えたい。例えば、調べ学習、意見や考えを共有するとき、個々の考えを分かりやすく伝えるときなど、１単位時間の授業の中のどこで使用すれば効果的かを考えた上で取り入れるようにする。

さらに、学年部で作成した仮説をもとに実践・検証し、「明星スタンダード」と呼べるものを構築していく。今年度は、以下の４点を「明星スタンダード」の例として提示した。

①　１時間完結型の授業構成

主体的な学びを促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」を設定する。

・学習の見通しを持たせ、意欲を持たせる「めあて」
・追究すべき事柄を明確にし、魅力ある「課題」
・追究した結果を明確にする「まとめ」
・学びの成果を実感し、次時への意欲につなげる「振り返り」

②　板書の工夫と構造化

・思考を整理したり促したりする板書
・子どもの思考の足跡が残り、思考の過程を振り返ることができる板書

③　習熟の程度に応じた指導

・「努力を要する状況にある」児童に対する支援の在り方
・高いレベルの課題に取り組み、子ども同士が高め合う授業
・算数・英語・理科におけるT・T指導や協力の在り方

④　問題解決的な展開

・主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を創造する学習展開

Ⅳ　研究方法

（１）研究仮説を柱に進める。　※学年部ごとに「仮説」を立てて実践し検証していく。

（２）【全体研】：各学年代表１名が行う。事前研、授業観察（密にならないよう学年部以外はビデオ参観）、事後研に全員が参加する。

【個人研】：全体研実施者以外の全員が行う。各学年部で事前研、授業観察、事後研を行う。

（３）授業研究教科：本年度は教科を特定せず取り組む。

Ⅴ　実践事例１　【第６学年　人権（部落問題学習）　指導者　古椎　賢一】

１　主　題　　差別を許さない心　～「九州から水平社創立大会に参加した田中さんの話」より～

２　目　標

○水平社が創立された時の時代背景と創立された目的を理解することができる。

○水平社を創立した人々の思いや願いに共感し、自分がこれから差別と向き合い、どのように生きていこうとするのかを考えることができる。

○「水平社宣言文」と「山田少年のさけび」を通して会場に入ろうか迷っていた田中さんの心情を考え、勇気を持って行動すること、それには仲間の協力が必要であることに気づく。

３　高学年の研究仮説

「人権教材」を扱った授業において、①１時間完結型　②板書の工夫と構造化　③問題解決的な展開　④具体的な評価規準の設定を行うことで、主体的な追究力と思考力・判断力・表現力の育成につなげることができる。

４　本時案

（１）題材　水平社をつくった人たち

（２）題目　創立大会に参加した人々の思いや願いを考えよう

（３）主題　「九州から創立大会に参加した田中さんの話」から、大会に参加しようとする田中さんの揺れる心情を話し合うことで、差別をなくそうと自ら立ちあがった人々の思いや願いに迫るとともに、自らも差別を許さない心を育てる。

（４）展開

過程	学習活動	時	指導上の留意点	評価
つかむ	１　前時までの活動を振り返り、読み終わった内容を把握する。	5	○前時で学習した内容を振り返り、本時の学習課題をつかませる。 ・解放令後も様々な差別が残ったことを確認させる。	田中さんの気持ちを考えることができる。
	【めあて】創立大会に参加した人々の思いや願いを考えよう			
考えを持つ・交流する			【課題】なぜ田中さんは迷ったのだろうか。	
	２　田中さんの気持ちの揺れについて考える。	20	○資料「九州から創立大会に参加した田中さんの話」を読み、田中さんがなぜ「帰ろう」と思ったのか、理由を考えさせる。 ・「入る」か「入らない」かを迷っている理由を考えさせ、田中さんの中に介在する心の葛藤の部分を想像させることで、自分自身の経験と重ねて考えさせる。	
まとめる		10	○「入る」ことを決意した田中さんはどんな気持ちだったかを合わせて考えさせる。	自分の生き方と重ね考えることができる。
	３　水平社の創立の意義についてせまる。	7	○当日岡崎公会堂にいた山田孝野次郎にふれ、「山田少年のさけび」の中で、田中さんと同じ思いであることを確認させる。 ・宣言文は差別されてきた人々のみに出されたものではなく、全ての人々に対して出されたものであること、後に田中さんはこの	

	4　本時をまとめる。	3	ことが原動力となり、九州支部創立に力を注いだこともおさえる。 ○これまでの学習の振り返りとこれからの自分の生き方にも重ねさせながらまとめる。	
	【まとめ】当たり前のことを当たり前に、おかしいことはおかしいと言えるような世の中にしていかなければならない。			

５　考察

（１）子どもの姿から

◇田中さんが会場に入るのを迷った理由について、子どもたちの中からは、「不安である」という言葉が多く出された。「『身分』がみんなに知られる怖さ」について書いている人数は少なかったが、「不安」という言葉の中に田中さんの感じた「怖さ」を読み取っているのではないかと予想された。教師が「不安」の中身をさらに汲み取る・問い返すなどすれば、子どもたちの深い気持ちを引き出せたのではないか。

◇子どもたちの振り返り（感想）の中に「差別は絶対にあってはいけないことだと思った。これから身近で差別が起こったとき、私は動く。そう決めた。（原文のまま）」というものがあった。自分の生き方に置きかえ、行動しようとする決意が見られる。今回の教材を導入した教師の意図が伝わっている証拠である。

（２）高学年の仮説から

◇本単元では、「お茶くみ当番」から「水平社宣言」まで計画的に教材を持ち込み、部落問題に触れ、本時の学習に結び付けた。単なる「人権学習」ではなく「部落問題学習」に取り組んだところに意義がある。１時間完結型の授業では、どのように子どもたちに考えを持たせ、さらにその考えを出し合い議論させる場を設定するかが大切であるが、人権学習でも教材や課題を絞り込むことによって、主体的な追究力を育むことできることが分かった。また、議論に結び付くような「課題」を「まとめ」から導き出す必要があることも分かった。

（３）人権教育の視点から

◇人権教育は、「人権感覚」と「知的理解」の重点の配分が大切である。「人権感覚」と「知的理解」の両方を育成し、それが統合することで、人権問題の解決に向かう実践力につながるからである。子どもたちは、「差別はよくない」ということは知識としては分かっている。しかし、単なる知識としての「人権」ではなく、不合理に対する「怒り」に子どもたちが共感すること、自分自身に置きかえて考えること、今後自分は何ができるか考えること等まで到達できる人権学習のあり方について、今後も研修を重ねる必要がある。

Ⅵ　実践事例２　　【第１学年　道徳　　指導者　渡邊　麻里】

１　主　題　　自分のよさ【内容項目：個人の伸長（主として自分自身に関すること）】

２　目　標

○自分の特徴に気づき、長所を大切にしようとする心情を育てる。

３　低学年の研究仮説

具体物や半具体物を使い、ペアやグループでの話し合い活動を通して、問題解決的な展開や板書の工夫と構造化をすることにより、子どもたちは課題へ主体的に取り組み、思考力・判断力・表現

力の育成につなげることができる。

4　本時案

（1）題材　　「ええところ」（絵本）

（2）本時のねらい

あいちゃんが自分のよさについて悩み行動する気持ちに寄り添うことを通して、自分のよさを知り、そのよさを大事に伸ばしていこうとする心情を育てる。

（3）展開

学習活動	時	指導上の留意点	評価
1　自分のよいところについて振り返る。 自分のよいところはどこかな	5	○子どもから出たよさを共感的に受け止め、教材につなげる。 ・よさが浮かばない子に対しても、自分のよさを見つけることの難しさに共感し、教材につなげる。	
2　読み聞かせを聞く。	6	○「ええところ」の絵本での読み聞かせを行う。 ・話の内容を理解して登場人物に寄り添えるように、登場人物について簡単に伝えてから読み始める。 ・全体に見えるようにモニターに映す。	
3 「ええところ」をもとに話し合う。 ちょっとだけなみだがでたとき、あいちゃんはどんな気持ちだったのかな	3	○「あいちゃん」の表情がよく分かるところを提示し、その時のあいちゃんの気持ちに寄り添えるようにする。 ・子どもの考えを板書し、あいちゃんの気持ちの変化に気づかせる。	
うつむいたらなみだがぽたぽた床に落ちたとき、あいちゃんはどんな気持ちだったかな	3	・課題提示までの話の流れをおさえる。	
【課題】「みんなにやさしいのが、あいちゃんのええところやとおもうわ」と言われて、あいちゃんはどんなきもちだったのかな			
	20	○ペアであいちゃんの気持ちについて話し合う。 ・あいちゃんの「ええところ」に気づいたともちゃんのよさもしっかりと感じ取らせるようにする。	あいちゃんの気持ちに寄り添うことができる。
4　本時のまとめと振り返りをする。 【ふりかえり】よいところとは、どんなところかな	5		

5　次時の確認をする。	3	○目に見える身体的・能力的なことだけでなく、目には見えない内面的なよさもそれぞれのよさであることを振り返らせる。 ○次の時間に、ともちゃんの気持ちについて考え、友だちのよいところを伝え合うことを伝える。	

５　考察

（１）子どもの姿から

◇あいちゃんが３回涙を流した場面に焦点を当てながら「課題につながる発問」と「課題」を提示していった。最後の涙はうれし涙であることに触れさせたかった。子どもたちは自分なりの考えを精一杯考え書いていた。中には、あいちゃんの気持ちだけでなく、ともちゃんの気持ちまで触れている子どももいて、教師の意図が伝わっていることが感じられた。

◇物語全文が入っている「絵本」、一部を切り取った「道徳の教材」、どちらを教材として使うのか、どの場面を切り出して、どの絵を使いたいのかによって違ってくる。今回使用した「ええところ」（絵本）の場合は、切り口が多いので、どの学年でも使うことができそうである。

（２）低学年の仮説から

◇低学年は、ペアやグループでの話し合い活動を通して、友だちと考えを交流させることで、自分の考えや思いを確かなものにし、課題へ主体的に取り組みことを期待している。発達段階によってペアなのかグループなのか取り入れる話し合い活動は違ってくるが、話し合い活動はなぜ必要なのかについて、再度教師間で確認する必要がある。

Ⅶ　まとめ

「明星スタンダード」の構築を目指し、各学年部で作成した仮説をもとに実践を重ねてきた。このレポート締切後にも、中学年部の提案授業が予定されている。低・中・高学年部の実践・検証をもとに、これが明星小学校の授業における「スタンダード」であるというものをまとめ、来年度は、本年度構築した「明星スタンダード」をさらに発展させていきたい。